

1. 競技引退によって体験されるアスリートの アイデンティティ再体制化の検討

はじめに

第18回オリンピック冬季競技大会の閉会式に臨んだ清水宏保選手(スピードスケート500M金メダリスト)は、次のようなコメントを残している。そこには、頂点を極めているアスリートが、同時に「新しい自分づくり」に着手し始めている姿を読みとることができる。

…目標を達成してわきあがってきたのは「競技の頂点は人間としての頂点ではない」という当たり前の思いでした…

(中略)…「競技者である前に、人間としてやるべきことをきちんと見つけていかなければ」という気持ちです…(中略)…金メダルは人生の通過点…

(1998年2月23日 朝日新聞朝刊)

アスリートとしての役割を中心として形成された「今までの自分」は、時として、目標達成や競技力低下、怪我など、競技生活の中で遭遇する様々な出来事を契機に組み換えられねばならない(25, 44, 50, 52, 60, 75)。清水選手の場合であれば、アスリートとして掲げた「金メダル獲得」という目標を達成し、これを「人生の通過点」と捉え直すことによって、アスリートとしての「今までの自分」のみでは、なかなか見つめ直すことのできなかつた「人間としてやるべきことをきちんと見つけていく」ことの大切さに気づいていったと読みとれる。そのような体験は、個々のライフサイクルの中で位置づけられながら意味をなさなければならない。そして、それは、いずれ現役を退いた後に歩む人生の中で、大きな役割を果たすに違いない。

競技引退は、その後の人生を歩んでいく上で大切な「新たな自分づくり」を求められる最たる出

来事であり、程度に差はあれ、アスリートである誰もがこれを避けて通ることはできない。彼らの中には、引退後の社会生活にうまく適応できる者もいれば、そうでない者もいる。そして、その「そうでない者」の中には、深刻な不適応を呈する場合も少なくはない(6, 14, 15, 35, 39, 40, 44, 49, 82)。

本研究では、アスリートの競技引退を課題とした先行研究を概観する。スポーツ心理学領域において積み重ねられてきたいくつかの成果は比較的新しく、他の研究領域から得られた優れた知見を理論的基礎としている場合が多い(6, 7, 23, 42, 52, 70, 71, 75)。そして、アスリートを取り巻く文化・社会的背景を加味した制度的な側面からアプローチすること(25, 45, 61, 62)、引退に関連した個々のアスリートの体験を追究することは(6, 23, 58, 72)、この種の問題究明には不可欠と考えられる。Rosenberg(1982)(65)は、引退に含まれる加齢や社会的圧力などの社会的問題もさることながら、引退に伴う心理社会的変化に対するアスリート自身の対処にアプローチすることが必要であると訴えた。本研究の立場もまた、スポーツ心理学領域以外の成果を可能な限り取りあげながらも、このテーマを個々の適応に焦点づけて扱っていくことにする。

これまでに著者らは、個々の適応に焦点を当てながら、アスリートの競技引退に関連する問題を扱ってきた(47, 48, 76-78)。ライフサイクルの中で現役を引退することが、彼ら自身にとってどのような意味を持つのか。そして、そこにはどのような発達課題が課せられているのか。このような生涯発達(life span development)の観点から捉えたとき、引退後の適応過程は、その後の社会生活へのスムーズな移行をもって良しと判断するわけにはいなくなる(85)。また、引退を通じて「何を」獲得し、その後の適応に向けて「どのように」取

り組んでいくのかは、来るべき次の発達の危機への対処の是非に影響してしまうかもしれない⁷⁸⁾。従って、アスリートである以前の生活からどのように競技を開始し、アスリートとして現役時代をどのように過ごし、引退をどのように体験したのかを明らかにすることが、その後、彼らがそれぞれの人生を歩む上で大きな意味を持つに違いない。そこには、共通する心理社会的な発達課題やプロセスが認められるのではないだろうか。そして、こうした疑問に答えていくことが、競技引退に関連して生起する適応問題への具体的な介入方略を検討することにつながっていくと考えられる。

本研究では、まず、アスリートの競技引退を課題とした先行研究を理論研究と実証研究の二側面から整理し、その特徴や限界を明らかにする。次に、既に諸外国において実施されている専門的介入プログラムに注目し、その特徴や問題点を指摘する。そして、これらを基にして、今後、この研究テーマに関連して取り上げられるべき研究課題を検討する。最後に、そのような研究課題を踏まえた上で、アイデンティティ再体制化の観点から引退後の適応を捉え、そこに含まれる問題を究明していくことの有効性を検討することが本研究の目的である。

1-1. 先行研究の概観

アスリートの競技引退を課題とした研究が本格的に開始されたのは、スポーツ社会学領域においては1950年代から、スポーツ心理学領域においては1980年代からといえる。それぞれの領域では、競技引退がアスリートにとって大きな危機的事象となっていることを明らかにしようとした意図がくみとられ、研究資料の扱いにも偏りが認められた。そこでは、具体的な事例が引き合いに出されるものの、それに対して体系的な分析が施されることは少なかった^{6, 7, 25, 51, 52, 71, 74, 82)}。

ここでは、これまでに得られた成果を「競技引退を説明しようとする理論の特徴とその限界」と

「代表的な実証研究から得られた知見」という二側面から概観することによって、今後、この研究領域において取り上げるべき課題を検討したい。以下ではまず、先行研究の中にみられる理論モデルの特徴を明らかにし、その限界を検討する。

1-1-1. 競技引退を説明する理論の特徴とその限界

競技引退は、アイデンティティ危機 (identity crisis) として捉えることができる^{5, 52, 60, 82, 83)}。Broom (1981)¹²⁾や Ogilvie and Howe (1982)⁴⁹⁾は、アスリートであることのみを手がかりとしてきた彼らは、その他の役割についての模索体験が少ないことから、引退に関連した深刻なアイデンティティ危機を引き起こしてしまうことを示唆している。そして、Botterill (1981)¹¹⁾は、そのような体験が心的外傷 (trauma) となる可能性を持つことを指摘した。

一方、競技引退を比較的、適応的に体験するアスリートも多いと指摘する者もいる。Coakley (1983)¹³⁾は、アスリートにとって引退が必ずしも心的外傷やアイデンティティ危機などの深刻な問題とはならないとし、これを一つの「キャリア終結 (career termination)」というよりも新たな人生への「再生 (rebirth)」と捉えるべきであると主張した。そして、「競技引退 (athletic retirement)」を「スポーツ競技への活発な参加から、他の活動へ移行するプロセス」⁷¹⁾と定義づけた。そこには、傾倒対象がスポーツ競技から他の領域へ「移ること (transition)」で、他の活動領域や関係を発達させる機会が提供されるという肯定的な意味合いが含まれていた。

確かに、一見相反するこのような可能性を認めることはできるが、競技を中心として生活を営んできたアスリートにとって、その存在意義をも問い直させられる競技引退体験は、その後の人生を歩む上で大きな意味を含んでいる。これが否定的な喪失体験となり、模索を繰り返しながら「新たな自分」を肯定的に再解釈していこうとする者も

いれば、大きな問題を呈することなくこの時期をスムーズに通り過ぎていく者もいる。両者が辿り着く先には、どのような異なりが待ち受けているのだろうか。そう考えるとき、ここでの発達の危機を如何に認知し、これに対して主体的に対処していくか否かが、個人のその後の人生に大きく作用するのではないかということが予測される。いずれにせよ、研究開始当初は、競技引退休験を説明し、理解するための理論モデルの構築が求められていたことには相違ない。

そして、Rosenberg(1981a)⁶³⁾は、競技引退を詳細かつ正確に説明できる理論モデルが欠如していることを指摘し、それが競技引退を課題とする研究を立ち遅らせているひとつの原因であると訴えた。これに端を発するような形で、社会老年学(social gerontology)³⁰⁾や死亡学(thanatology)^{31, 32)}、成人移行論(adult transition theory)^{66, 67)}からの知見が参考とされ始めた。しかし、その後、これらの理論モデルの適用が疑問視されるようになっていった^{6, 26)}。以下では、その歴史的経過を踏まえつつ、アスリートの競技引退を課題とした理論研究について触れてみたい。

まず、McPherson(1980)⁴¹⁾とRosenberg(1981b)⁶⁴⁾は、競技引退に伴う職業的、心理的問題についての研究を行い、加齢と生活満足度における定年退職との類似性を指摘し、社会老年学に関連したいくつかの理論が有益であるとした。特に社会的役割の取捨の観点から、活動説(activity theory: ある活動と同じレベルで他の活動に従事する)、離脱説(disengagement theory: ある役割から全く離れてしまう)、連続説(continuity theory: ある活動を続けるが活動レベルを落としていく)、社会的解体説(social breakdown theory: ある役割から離れ、全体的な活動レベルを落としていく)などに基づいて、アスリートが競技引退においてとる行動パターンを捉えようとする試みが行われた^{20, 25, 51, 71, 75)}。

しかしながら、このような加齢に伴う役割変化がアスリートに合致しない点も多い。社会老年学

は、ある役割を離れることによって自尊心や満足感が得られるとする加齢の特徴を強調したが、アスリートは競技力が低下してもその役割に留まろうとしたり、引退に際して競技的役割と同等の対象を見出すのが困難で、結局、役割喪失を体験してしまう場合も認められた。従って、社会老年学にみられるこれらの理論は、アスリート固有の現象に対する解釈を提供するまでには至らなかった。また、この枠組みでは競技引退に伴う情緒反応を捉えることが困難なことから、Blinde and Greendorfer(1985)⁹⁾とGreendorfer and Blinde(1985)²⁶⁾は、社会老年学の理論に頼ることが詳細かつ厳密な現象理解の妨げになると訴えた。

次に、Rosenberg(1982)⁶⁵⁾とLerch(1982)³⁶⁾は、死亡学的なアプローチの有用性を強調し、Kastenbaum(1981)³¹⁾の提唱した「社会的死(social death)」の概念を拠り所として、競技引退に伴う心理社会的な変化を説明しようとした。ここで捉える「社会的死」とは、所属していた集団からの社会的な孤立や排除を意味し、個人を生物学的もしくは心理学的な「個」としてよりも、社会的な「個」として捉えている。また、その一方で、アスリート自身が引退を迎えるまでに辿るプロセスをKubler-Ross(1969)³²⁾の「臨死の5段階: 否認 怒り 取引 抑うつ 受容」に基づいて捉えようとした^{3, 37)}。怪我などによって突然引退を強いられる場合、アスリートは「対象喪失」の状態に陥り、適応状況に至るまで一定の情緒段階を踏むというものである。両者は、競技引退を、アスリートにとって心的外傷となりうる危険性を含むものであると捉えている点で共通していた。

しかしながら、死亡学的立場では競技引退休験の否定的な側面を強調するがあまり、自発的に引退を迎えたアスリートの肯定的側面を捉えられてはいない。また、そこでは、「死」を中心とした喪失体験において個人が辿ったプロセスの理解が中心的な課題とされており、そこに含まれる心的外傷反応に寄与する要因を検討してはいなかった。つまり、そういった喪失体験を個人がどのように

克服していったのか、といった予後の適応を予測するまでには至っていない。これらのことを考慮すると、この理論的立場は、当該現象を詳細に理解するに適しているとは言い難い⁷⁶⁾。

これまでみてきた社会老年学的立場と死亡学的立場に共通するのは、競技引退を単一で突然の出来事として捉えていることと、競技的役割から撤退することに伴って深刻な対処困難が体験されるとしていることであった。両者の立場は、個々のアスリートの捉え方によって、彼らが直面した競技引退の意味づけが異なるという個人差の問題が考慮されてはいない。どのような出来事もその重要性や影響は個人によって異なることから、個々の体験を重視し、そこでの体験様式を明らかにしていくことが求められるのではないだろうか。そう考えると、引退を生涯の中で非連続的な出来事とするよりも個人の発達や成長などを含むひとつのプロセスとみなし、引退に伴って体験する個々のアスリートの心理的变化を捉えることができる枠組みが必要となる。

上述の課題に答えるかのように、Schlossberg(1981, 1984)^{66, 67)}の成人移行モデルを頼りにして、競技引退を通じての個々のアスリートの体験を説明しようとする試みが行われ始めた。この理論モデルでは、移行に伴う役割変化が獲得的なものか、喪失的なものか、そこで生じた感情は肯定的なものか、否定的なものか、主体的意志による移行か、外的に強制された移行か、予測可能か、否か、などの観点によって移行体験を捉えている。これらの観点に照らし合わせてみると、競技引退という移行体験は、個々のアスリートによって持つ意味合いが異なることは明らかであり、全てのアスリートが体験するものであり、予測可能であるといえる。従って、そこに含まれる問題の対処の仕方によっては、さらなる発達や成長が期待でき、尚かつ、適応的にこの時期を乗り越えることも十分可能になると考えられる。1990年代初頭には、このモデルを基に、競技引退をひとつの移行体験と捉え、その特徴が検

討されるようになった⁷³⁾。しかしながら、移行体験は、結果としてある程度のストレスや喪失感に結びつき、これに対しては多くの対処様式が求められることになる。この対処様式には何が寄与するのか。また、どのような要因が引退後に直面する適応問題を予測するのか、といった疑問に対して、この理論的立場から十分な成果を得ているとは言い難い^{25, 69)}。

また、Taylor and Ogilvie(1994)⁷⁵⁾は、Baillie and Danish(1992)⁶⁾が得た知見に基づき、アスリート自身が競技引退に関連して体験する情緒反応やこれに含まれる問題を捉えるために、競技引退過程の全体的な流れを示した総合的モデルを作成した(図1参照)。そこでは、引退の原因、適応に関連した要因、利用可能な資源、本質的な適応、困難さへの介入、などを明らかにすることによって、引退過程においてアスリートがどのような体験をしているのかについて、総合的に特徴づけることができた。しかし、現段階では、このモデルの妥当性を検討するまでには至っていない。

このように、当該現象を説明し理解しようとする試みは、社会老年学や死亡学などの立場から説明しようとする段階から、最近では、成人移行論の立場を参考にしながら、競技引退に関連して生起する問題に対する個々のアスリートの反応を明らかにしようとする段階へと移り変わってきていることが認められる。研究開始当初は、アスリートが競技引退に直面したときに体験する困難さばかりに焦点が向けられており、社会老年学や死亡学などの理論的立場からでは、自ずと研究資料に対しても偏りのある扱いがなされていた。しかしながら、個々のアスリートによって競技引退の持つ意味合いは異なり、彼らの発達や成長を期するのであれば、この時期をスムーズに通り過ぎることよりも、その後の歩みに役立てられるように

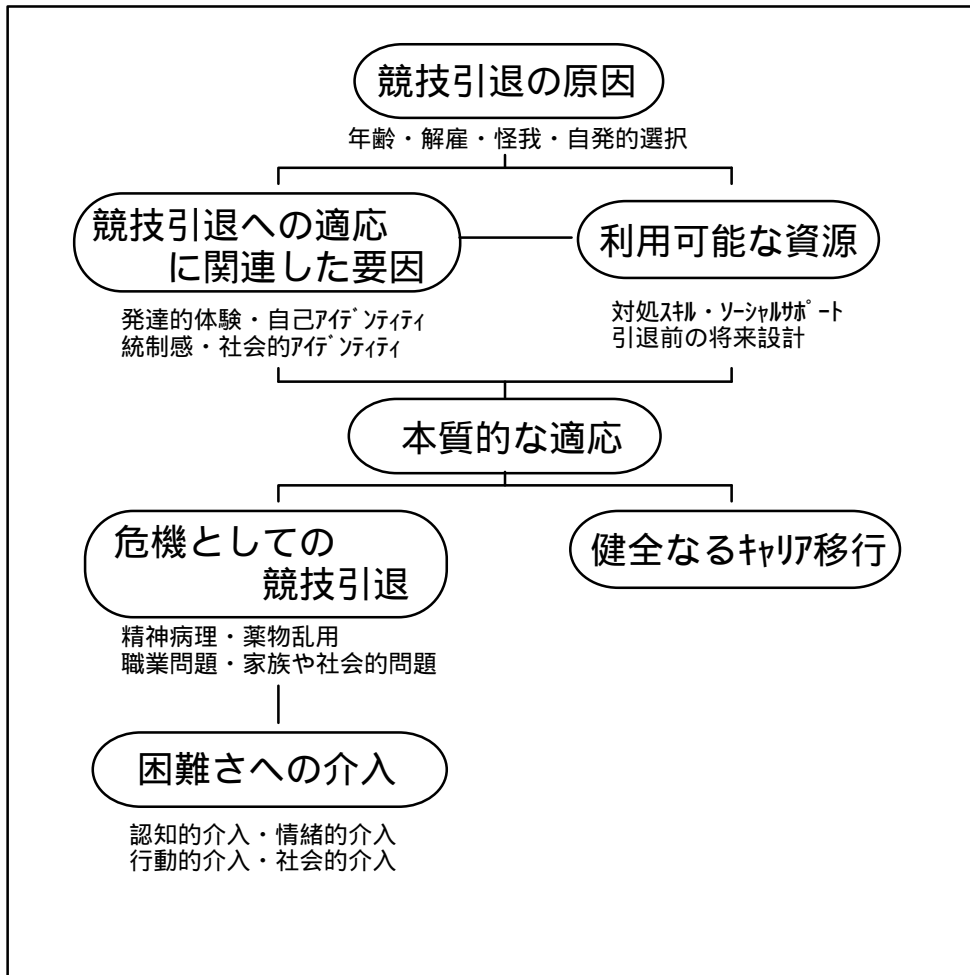


図 1 : 引退の全体的な流れ

(Taylor & Ogilvie(1994)に一部加筆)

競技引退を体験することが第一義とされるべきである。この時期を如何に過ごすのか。そして、それは個人の長い人生にとってどのような意味を持つのか。これらの疑問に答えるべく、生涯発達論を拠り所として当該現象を理解することが肝要であると考えられる。

1-1-2. 代表的な実証研究から得られた知見

先述したように、アスリートの競技引退を課題とした実証研究は少ないながらも、いくつかの代表的な研究から有益な知見を得ることができる（表1参照）。ここでは、それを、「研究対象の拡大」と「研究課題の変遷」という二側面から概観する。

1) 研究対象の拡大

競技引退に関連する調査研究は、最初にプロフェッショナル（以下、プロと称する）アスリートを対象として着手され、その後、アマチュアアスリートへと研究対象が拡大されていった。1952年に元プロボクサーの引退後の適応問題が明らかにされて以来、元プロサッカー選手⁴³⁾や元プロ野球選手^{2, 8, 24, 29)}、元プロアメリカンフットボール選手^{24, 29)}などを対象とした研究が1980年代を中心に展開された。また、これらの調査は、主にスポーツ社会学領域において行われており、その背景としては、プロアスリートの社会的地位の高揚とは裏腹に、就職困難や社会的地位の低下など、引退後の社会構造の中において彼らが体験した困難さへ関心が寄せられるようになったことが挙げられる。ここでは、プロアスリートとしての生活スタイルが、引退後の社会生活への適応困難を招いているということが中心的な論点であった。

例えば、Weinberg and Arond (1952)⁸⁰⁾は、チャンピオンの経歴を有する元プロボクサーとその対戦相手らの多くが、引退後に特定の職業に就くことが困難であったり、社会的地位や名声が低下

したり、収入が激減したりすることから情緒的困難さを体験していたことを指摘し、その原因として、身体的な機能障害やマネージャーへの依存的態度などを挙げた。また、Haerle (1975)²⁹⁾は、元プロ野球選手の大半が引退を迎えるまで将来設計を立てていないこと、引退後の適応問題には個々の教育レベルが関与していることなどを指摘した。Allison and Meyer (1988)¹⁾は、元女性プロテニスプレイヤーに対してインタビュー調査を実施し、引退に関連して生起する女性特有の問題を取り上げた。ここでは、それまで男性アスリートを対象として行われてきた調査研究からの主張が、女性アスリートにおいても同様であることが確認されている。

その後、オリンピックやその他の国際大会への出場経歴のある元アマチュアアスリート^{5, 82)}や元学生アスリート^{5, 10, 27, 59)}を対象とした調査が研究の主流を占めるようになる。それには、アマチュアスポーツの高度化に伴って、彼らの引退後の適応問題も深刻化し、これへの対応が急がれたことが背景にあると考えられる。例えば、Wethner and Orlick (1986)⁸²⁾とSinclair and Orlick (1993)⁷⁰⁾は、カナダの元トップアマチュアアスリートを対象として、引退後の適応に影響する要因を取り上げ、一方、Groveら(1997)²⁸⁾は、元オーストラリア代表選手を対象として、アスリートのキャリア移行に対する具体的介入方略を検討した。競技への関わり方が異なるプロとアマチュアの間には、彼らを取り巻く環境において相違が認められるものの、競技を中心としたそれまでの生活に何らかの転換を迫られることに相違はない⁵¹⁾。先にも触れたが、個々のアスリートによって競技引退の持つ意味合いが異なり、その重要性や影響に差異が生じるのであれば、個々のアスリートが体験した変化をいくつかの変数とし、引退後の適応を予測することが問題究明への有効なアプローチになると考えられた。

2) 研究課題の変遷

実証研究においてこれまでに取り上げられた研究課題を概観すると、まずはじめに、「競技引退に関連する問題の把握」がクローズアップされ、次には「引退後の適応問題を規定する要因の同定」が課題とされ、さらに、最近では、「具体的な介入方略の探求」を中心として研究が展開されてきていることが認められる。このように三段階に渡って、研究課題は変遷してきていた。以下では、これらの流れを踏まえつつ、その詳細をみていくことにする。

まずはじめに、プロアスリートが競技引退に関連して体験する困難さを明らかにすることが課題とされた^{51, 57, 80, 81)}。そこでは、引退が必ずしも困難を伴う体験であるとは限らず、自発的に引退を迎え、その後の社会に適応していく場合も少なくないことから、どのような要因が引退後の適応に寄与するのかを検討する必要が生じた。

その後、Ogilvie and Howe (1982, 1986)^{49, 50)}は、競技生活が終結する理由を、セレクションプロセス、加齢、怪我の3つに大別し、これらが引退後の適応に影響すると示唆した。また Werthner and Orlick (1986)⁸²⁾は、カナダの元トップアマチュアアスリート 28 名に対するインタビュー調査から、引退後の適応問題に影響する要因として、新しい目標・達成感・コーチング・怪我/健康問題・スポーツ協会の問題・財源・家族や親しい友人のサポート、の7つを同定した。しかし、これらの要因もまた競技引退の否定的側面を強調する意図から、彼らの移行体験がどれほど困難であったのかを捉えようとしており、また、具体的な介入方略を想定していた訳ではなかった。つまり、この時期を如何にしてスムーズに通過できるかが中心的な論点であり、そこでは、個々のアスリートが「何を」「どのように」獲得していったのかが検討されてはいなかった。引退後の取り組みは、それまでの生活の積み重ねによって左右されるとも捉えることができ、従って、個々のアスリートがど

のような取り組みから、引退後の生活への組み換えを行っていったのかを明らかにする必要がある⁶⁰⁾。そこには、具体的な介入方略を検討していく糸口が存在するに違いない。

また、Sinclair and Orlick (1993)⁷⁰⁾は組織的な介入方略の必要性を訴え、Murphy (1995)⁴⁴⁾は移行後においてもスポーツ状況で獲得した心理的スキルが利用可能であることを主張した。一方、Grove ら (1997)²⁸⁾は引退後の適応問題を経済的、職業的、情緒的、社会的側面に分類して捉え、Lavallee ら (1997)^{33, 34)}は引退時に生じるストレスへの具体的な対処法や競技的アイデンティティ（アスリートとしての役割から自己定義している程度）が引退後の適応問題に与える影響について検討している。

このように、適応を規定する要因を検討する一方で、Danish ら (1980, 1992, 1993, 1995)¹⁶⁻¹⁹⁾は、移行後の適応問題への介入を想定した生涯発達の介入モデル (Life Developmental Intervention: 以下 LDI モデルと称す) を提唱し、競技期での一次的予防、移行期での二次的予防、引退後の適応問題への直接的介入という3つの介入方略を提示している (図2 参照)。特に、Danish ら (1995)¹⁹⁾は、個別のカウンセリングを通じて目標設定方略を実施した事例を提示し、この LDI モデルの有効性を検討している。また Baillie (1993)⁷⁾は、この中の2つの予防的介入の重要性を訴え、アスリートの競技生活が生涯発達を含めた長期的展望に基づいて捉えられるべきであるとした。このモデルは引退に伴う適応問題の改善を前提としており、これを拠り所として、一部ではあるが既に専門的な介入プログラムの実施にまで及んでいる⁶²⁾。さらに、近年では Wylleman ら (1993)⁸⁴⁾や Ungerleider (1997)⁷⁹⁾も移行期のサポートの重要性を訴えている。

このように、実証研究における研究課題は、「競技引退に関連する問題の把握」から「引退後の適応問題を規定する要因の同定」、「具体的な介

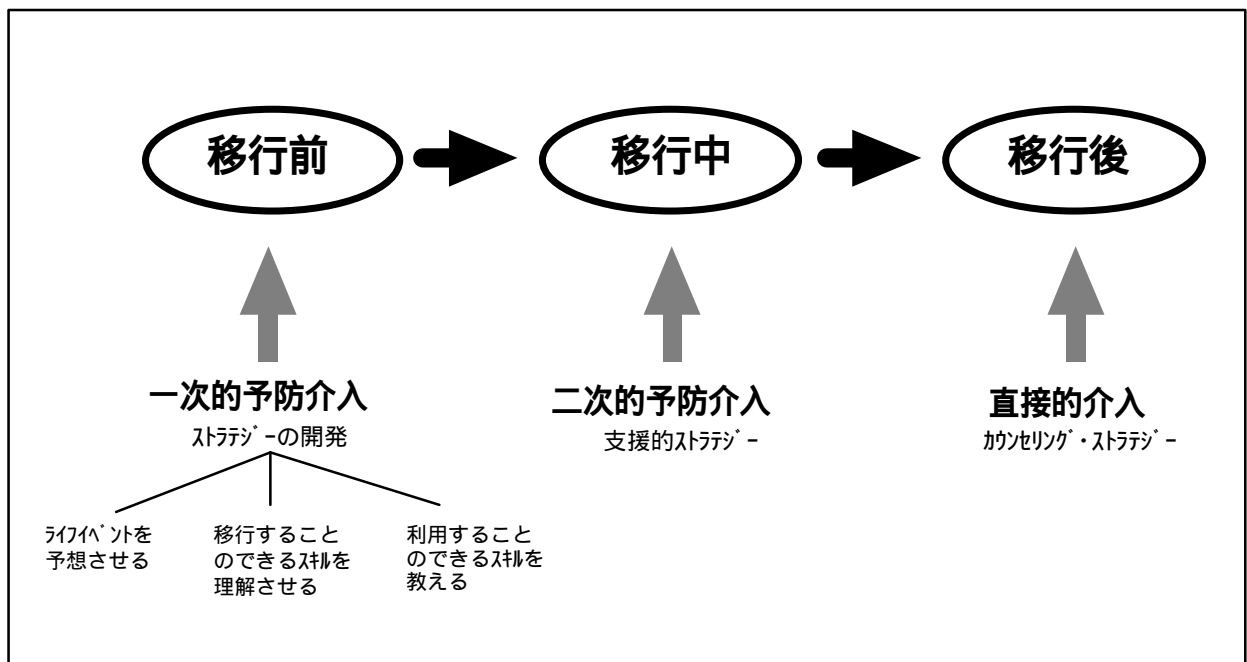


図 2 : LDIモデル

(Danish(1980)に一部加筆)

入方略の探求」へと変遷してきた。その背景では、競技引退が困難さを体験するひとつの非連続的な出来事であるとする偏った見解から、これを発達や成長を期することのできるひとつのプロセスとする見解へと移り変わっていた。また、近年においては、引退に関連して生起する問題に対して生涯発達の立場から介入することを主張する研究者たちが多いことがわかる。彼らの取り組みには、個々のアスリートが競技引退を通じて「何を」「どのように」獲得したのかを明らかにすることが先決となる⁸³⁾。また、そこで獲得された心理的資源が引退後の生活においてどのように生かされていたのかについても検討せねばならない。これらの課題に取り組んでいくことが、今後の実証研究においても求められているようである。

先述したように、諸外国においては、近年、移行期でのサポートに焦点を当てたキャリア移行援助プログラムが開発され、既に実施されている。そこには、引退に直面したアスリートは自らを「どのように組み換えていくべきか」といった支援側の理念が反映されているようである。つまり、具体的な専門的介入方略を検討していくためには、どのような理論を拠り所として現象を理解し、どのようにして現場に介入していくかが大きな問題となる。今後、我が国独自の介入プログラムを確立していくためには、これらの先行するプログラムがどのような理念を背景として、どのように実施されているのかを把握することが先決であると考えられる。

1-2. 諸外国におけるキャリア移行援助プログラム

表2に示すように、既に諸外国においては、アスリートの引退後の生活への適応を支援していくことを目的としたキャリア援助プログラムが開始されている²⁵⁾。その実施対象は、1) 学生アスリート、2) エリートアマチュアアスリート、3) プロアスリートに大別され、既にプログラム実施の報告もなされている^{25, 62)}。

ここで、これらのプログラムを取り上げるのには大きな意味がある。なぜならば、各プログラムの目的や内容から、どのような理論的立場を拠り所としているのか、また、引退後の適応を促進するものとしてどのような要因に注目しているのか、などを類推することによって、引退後の適応問題を究明していく上で捉えるべき研究課題を改めて把握することが可能になると考えるからである。

例えば、CAPA (Career Assistance Program for Athletes) は、1988年に設立、1992年から実施されており、ここでは特に、引退に含まれる移行体験に伴う情緒的問題と社会的問題への対処、移行やキャリア開発への対処に有効な資源の利用、職業に関連する情報の提供、という3つの領域に関心が寄せられた^{25, 44, 62)}。先にも触れたようにCAPAはLDIモデルを理論的基礎としており、アスリートとして獲得したスキルは、引退後にも移行可能であり、これを明確に提示し個々に理解させることによって、彼らの引退後の有能感を高めることができるとしている。

また、ACE (Athlete Career and Education Program) はAIS (Australian Institute of Sport) によって、1992年から実施されている。ここでは、「バランスのとれたスポーツでの卓越 ("a balanced approach to sporting excellence")」をモットーとして、教育指導、将来設計や関連ネットワークの紹介、移行期の援助などが実施されている²⁵⁾。

これらのプログラムは、生涯発達論をその中心的な枠組みとしており、アスリートのキャリア移行を促進する成果を得ている。ここでは、彼らの個人的な発達や成長が重視され、キャリア移行後の適応を支援するためには、移行期ばかりではなく、これに遡る競技期においても、移行後の人生をも考慮した競技への取り組みをアスリートに求めるべきであるとしている。引退以前に、いずれ直面するであろう危機的状況に対処するための諸能力をどのようにして獲得するのか。また、そ

れはどのように発達していくのか。これらは、今後も重要な課題とされるであろう。

一方、プログラムを開始する時期やサービス内容の決定、その実施期間など、それぞれのプログラムの詳細の多くが公式化されてはいないようにも感じられる。また、そこでは、引退を経て社会生活にスムーズに移行することを優先するがあまりに、この時期に解決されるべき心理社会的発達課題の多くを無視してしまっているのではないかという指摘もある⁷⁸⁾。アスリートは、自分自身の問題として競技引退に直面していかなばならない。そこでは、周囲からの支援を受ける立場にありながらも、様々な問題に対して主体的に取り組んでいくことこそが求められているのではないだろうか。そう考えると、個々のアスリートの発達や成長にとって「何が求められるべきか」を予め明確にしておくことが不可欠となろう。我が国独自のキャリア移行援助プログラムを開発、実施していくためにも、このような問題点を十分に考慮しなければならない。

1-3. 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化

これまで、アスリートの競技引退を課題とした先行研究と諸外国において既に実施されている介入プログラムを概観してきた。それによって、個々のアスリートが競技引退を通じて「何を」「どのように」獲得し、そして、それを引退後の生活においてどのように生かしていったのかを検討し、それを踏まえた上で、専門的介入方略を考案することが求められるようになってきたことが認められるに至った。そして、競技引退体験の中でさらなる発達や成長を期するためにはアスリートに「何が求められるべきか」とする論点は、生涯発達論を拠り所とするところが大きいことも明らかとなった。このような概観を踏まえて、著者らは、個々のアスリートの競技引退体験を説明・理解し、これに伴う問題へ介入していく上で、「アイデンティティ再体制化 (identity reconfirmation)」が有

効な視点になり得ると考えている。

アイデンティティ (identity) とは「自分が何者であるのか」「本当の、正真正銘の自分とは何か」ということを意味し^{4, 21)}、エリクソン (1959)²²⁾ は「アイデンティティ形成は、青年期に始まり終わるというものではなく (中略) その大半が一生涯を通じて続く無意識的な発達のプロセスである」とした。つまり、成人期・中年期に至ってもアイデンティティは発達・深化していくものであるといえる^{38, 74)}。このことを踏まえて、岡本⁵³⁻⁵⁶⁾ は中年期の心性に対してアイデンティティ危機から種々の検討を加え、成人期におけるアイデンティティの発達過程についてラセン式発達を提唱した。そして、アイデンティティの成熟に関わる要因として、自己の内的危機の認知とその主体的な模索・解決が不可欠であることを指摘した。

競技引退を経て社会生活に適應していくプロセスの中で、アスリートは、青年期を通じて獲得してきた「アスリートとしての自分」を再吟味し、「新たな自分」を編成していくというアイデンティティ再体制化を体験する。たとえ、引退直後の社会生活にスムーズに移行できたとしても、それに伴ってしっかりとしたアイデンティティ再体制化がなされていなければ、それは結局、解決しなければならない発達課題を先送りにする事になり、後々、より深刻な問題となって直面することにもなりかねない。また、その時期の体験が以後の発達課題の解決に彩りを与えることになる。従って、よりスムーズな移行を助長することを求めるよりも、「如何にしてこの時期を乗り越えるのか」が重要な問題となる。そして、その乗り越え方というのは、それまでの競技との関わり方に規定されているものと考えられる。

中込 (1993)⁴⁶⁾ は、スポーツ場面での危機への対処の仕方が、青年期にあるアスリートのアイデンティティ形成といった心理社会的発達課題への取り組みにおいても繰り返されることを指摘した。そこでは、スポーツ場面での危機様態の相互性が

アスリートの人格発達に関連することを明らかにした。このような主張からも、アスリートとしてのアイデンティティをどのように獲得し、「アスリートとしての自分」のみを手がかりとした中で、様々な体験にどのように関わっていったのが、引退後の適応問題に大きく影響するとも考えることができよう⁷⁶⁾。

また、冒頭でも触れたが、どのようなアスリートにとっても競技引退には共通の心理社会的な発達課題とプロセスが確認できるものと考えられる。彼らには生涯発達を念頭においた個々の課題解決が要求されており、従って、全体的な傾向を探ると同時に、引退を迎えた、そして経験したアスリートにとって、個別の意味を踏まえながら、その後の辿った歩みとの照らし合わせをすることも大切になる。

このような前提のもと、著者らはいくつかの取り組みを開始した。

中込ら(1998)⁴⁸⁾は、Jリーグでの所属経歴を持ち、JFL(Jリーグの下部組織)へ移籍した元Jリーガーを対象として調査を行った結果、彼らにとって移籍は肯定的な意味合いを含んでいる一方で、移籍後の状況に対して傾倒することを余儀なくされ、引退後の生活を展望できずにいることを指摘した。そこでは、サッカー選手としてのアイデンティティに固執するがあまり引退後の展望を疎かにしてしまい、このことが引退後の生活に対して深刻な適応困難を招くことが危惧された。

このような状況を踏まえると、アスリートのスポーツ競技への関わり方と競技引退への対処とが、引退後の適応問題に影響することが予測された。従って、元アスリートがスポーツ競技にどのように取り組み、競技引退をどのように体験したのかを詳細に知ることが肝要となった。

そこで、豊田・中込(1996)⁷⁶⁾は元アマチュアアスリートを対象とし、引退後の社会生活に対する適応問題に影響すると予測された6つの心理的要因(同一性の保ち方、時間的展望、社会化予期、将来の展望、役割受容、ソーシャルサポート)を

取り上げ、アイデンティティ再体制化の観点から各タイプ(再達成型、軌道内安定型、停滞・妥協型、模索型、不安・防御型)の特徴を明らかにした。その中で特に、「これ以上競技を継続できないことへの気づき」という社会化予期(anticipatory socialization)と「今後を見通す」という時間的展望(time perspective)が、引退後の社会生活への積極的な関わりを規定する要因であることを確認した。しかしながら、これらの2要因が具体的にどのような役割を果たしているのかを詳細に検討するまでには至っておらず、このことが課題として残された。

そして、上述の課題に答えるべく、豊田(1999)⁷⁸⁾は、中年期危機を体験した元オリンピック代表選手2名を取り上げ、数回に及ぶインタビュー調査を行った。その結果、引退に関連してアスリートが体験したアイデンティティ再体制化には、1)引退のきっかけとなる出来事、2)アスリートである自分の歩みの再吟味と引退への方向づけ、3)競技からの移行、4)職場への傾倒、というプロセスが認められることを明らかにした。次に、競技引退に伴うアイデンティティ再体制化が、その後の人生に与える影響を検討した結果、これらのプロセスの中で、社会化予期は競技から新たな社会生活への移行を助長し、時間的展望はアイデンティティ再体制化における課題解決の程度を決定づけることを確認した。そして、競技引退を通じて体験されたアイデンティティ再体制化において積み残された課題は、中年期に再び問い直されることもあることを指摘した。

著者らのこれまでの取り組みでは、アイデンティティ再体制化の観点から、競技引退に関連して元アスリートが「どのような体験をしてきたのか」が説明され、引退後の適応に寄与する要因が抽出された。また、彼らの競技への関わり方は、競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に反映されており、そこでは、競技への主体的な関わりが求められていた。そして、競技引退に伴うアイデンティティ再体制化への取り組みは、その後の人生に

おいても大きく影響していたことも確認された。

このように競技引退という課題の中で、個々のアスリートに課せられた発達や成長を捉えていくためには、アスリートの生涯発達を念頭においた枠組みが適切かつ有益であるといえる。そして、彼らが競技引退を通じて、「何を」「どのように」獲得していったのか、また、彼らの発達や成長を期するには「何が求められるべきなのか」といった疑問に対して、アイデンティティ再体制化は有効な視点を提供するものと考えられる。つまり、一連の研究からは、アスリートは、具体的な見通し（時間的展望）を持ち、予めこれ以上競技を継続できないことに気づくこと（社会化予期）で、引退後の生活に対して適応的に対応することができ、また、競技生活の中で自分の取り組む競技に対しては主体的な関わりを持つことによって、競技引退に伴う「新たな自分づくり」が有意義に体験され、強いては、それが、その後の歩みにまでも大きく寄与することが示唆された。

1-4. まとめ

本研究では、アスリートの競技引退を課題とした先行研究を、理論研究と実証研究に大別して概観してきた。全体的に多くのジャーナリスティックな逸話が存在する一方で、これに関連する実証研究は少なく、本テーマに関する歴史は比較的浅いといえる。

理論研究においては、社会老年学や死亡学からの理論的枠組みに始まり、次には、成人移行論を参考にするようになり、近年に至っては、生涯発達を拠り所として引退休験に含まれる固有の問題を捉えようとする試みが認められた。つまり、競技引退を危機的事象とする側面からのみで解釈していた段階から、これを発達や成長の機会を含むひとつのプロセスとして解釈する段階へ移り変わっていた。一方、実証研究においては、プロからアマチュアへと研究対象が拡大され、そこで取り上げられる研究課題も競技引退に関連する問題の

把握から引退後の適応問題を規定する要因の同定、そして、具体的な介入方略の探求へと変遷していた。そこでは、引退の持つ意味合いや影響が個人によって異なることから、個々のアスリートが競技引退を通じて「何を」「どのように」獲得したのかを明らかにすることが、重要な課題であることが確認された。

次に、諸外国において既に実施されている専門的介入プログラムの例をいくつか提示した。これらのプログラムの多くが生涯発達を理論的枠組みとしており、アスリートの個人的な発達や成長が重視されていた。つまり、そこには、アスリートに「何が求められるべきなのか」といった支援者側の理念が反映されている。そして、このような疑問に答えていくことが、ひいては、我が国独自の専門的介入の確立へ向けての具体的な取り組みを可能にすると考えられた。

上述のような研究課題を踏まえて、著者らは、個々のアスリートの適応に焦点を当て、競技引退に伴うアイデンティティ再体制化について検討を重ねてきた。一連の研究からは、具体的な見通しの中でこれ以上競技を継続できないことに気づくことが引退後の適応を促し、また、競技に対して主体的に関わっていくことが「新たな自分づくり」に寄与し、その後の人生にも影響することが示唆された。

著者らは、既に引退を経験したアスリートに対して事例的にアプローチすることが、彼らの引退に関連して直面した複雑かつ多次元性に富んだ問題を解決していく糸口を提供してくれるものと考えている。アスリートが競技に関わるようになり、競技に傾倒し、競技引退を迎え、社会に適応していくプロセスはまさに力動的であり、これについての事例を詳細に検討していくことにより、彼らの内面により一層深く迫ることができると考えている。いわば単なる説明的な実証ではなく、事例の中で追体験をしていく了解的な実証を通じてこそ、彼らの歩んだ道のりをより詳しく把握できるのではないだろうか。言うなれば、元アスリート

の一人ひとりを大切にしながら情報を収集することが、彼らの「生きることの質(quality of life)」⁴⁾に関する洞察を深め、「アスリートはどうあるべきか」といった壮大なテーマにアプローチする一歩となるに違いない。また、そのような歩みの積み重ねが、清水選手が「人間としてやるべきことをきちんと見つけていく」ことに気づいていったように、個々のアスリートが意味ある「新たな自分づくり」を体験していくための一助となるような方略を見出すことにもつながるだろうと考えている。

文 献 (Reference)

- 1) Allison, M. T. & Meyer, C. (1988) Career problems and retirement among elite athletes: The female tennis professional. *Sociology of Sport Journal* 5: 212-222.
- 2) Arviko, I. (1976) Factor influencing the job and life satisfaction of retired baseball player. Unpublished master's thesis, University of Waterloo: Ontario.
- 3) Astle, S.J. (1986) The experience of loss in athletes. *Journal of Sport Medicine* 26: 279-28.
- 4) バーバラ・フィリップ: 福富護訳 (1988) 新版 生涯発達心理学-エリクソンによる人間の一生とその可能性-. 川島書店: 東京. <Barbara, M. N. & Philip, R. N. (1975) Development through life: Third edition - A psychosocial approach -. Dorsey Press. Illinois. >
- 5) Baillie, P.H.F. (1992) Career transition in elite and professional athletes: A study of individuals in their preparation for and adjustment to retirement from competitive sports. Unpublished doctoral dissertation, Virginia Commonwealth University: Virginia.
- 6) Baillie, P.H.F. & Danish, S.J. (1992) Understanding the career transition of athletes. *The Sport Psychologist* 6: 77-98.
- 7) Baillie, P.H.F. (1993) Understanding retirement from sport: Therapeutic ideas for helping athletes in transition. *The Counseling Psychologist* 21(3): 339-410.
- 8) Blann, W. & Zaichowsky, L. (1989) National Hockey League and Major League Baseball players' post-sport career transition surveys. Final report for the National Hockey League Players' Association.
- 9) Blinde, E.M. & Greendorfer, S. L. (1985) A reconceptualization of the process of leaving the role of competitive athlete. *International Review for Sociology of Sport* 20: 87-93.
- 10) Blinde, E.M. & Stratta, T.M. (1992) The "sport career death" of college athletes: Involuntary and unanticipated sport exits. *Journal of Sport Behavior* 15: 3-20.
- 11) Botterill, C. (1981) What "ending" tell us about "beginnings." In: Orlick, T., Partington, J., & Salmela, J. (Eds.) *Mental training for coaches and athletes. Fitness and Amateur Sport: Ottawa.* pp. 164-165.
- 12) Broom, E.F. (1981) Detraining and retirement from high level competition: A reaction to "retirement from high level competition" and "Career crisis in sport." In: Orlick, T., Partington, J., & Salmela, J. (Eds.) *Mental training for coaches and athletes. Fitness and Amateur Sport: Ottawa.* pp. 183-188.
- 13) Coakley, J.J. (1983) Leaving competitive sport: Retirement or rebirth? *Quest* 35: 1-11.
- 14) Crook, J.M. & Robertson, S. E. (1991) Transition out of elite sport. *International Journal of Sport Psychology* 22: 115-127.
- 15) Curtis, J. & Ennis, R. (1988) Negative consequences of leaving competitive sport?

- Comparative findings for former elite-level hockey Player. *Sociology of Sport Journal* 5: 87-106.
- 16) Danish, S.J. and D'Augelli, A. R. (1980) Promoting competence and enhancing development through life development intervention. In: Bond, L.A. and Rosen, J.C. (Eds.) *Primary Prevention of Psycho-pathology*, 4. University Press of New England: Hanover, NH. pp. 105-129.
- 17) Danish, S.J., Petitpas, A.J. & Hale, B. D. (1992) A developmental-educational intervention model of sport psychology. *The Sport Psychologist* 6: 403-415.
- 18) Danish, S.J., Petitpas, A.J. & Hale, B. D. (1993) Life development intervention for athletes: Life skills through sport. *The Counseling Psychologist* 21(3): 352-385.
- 19) Danish, S.J., Petitpas, A.J. & Hale, B. D. (1995) Psychological interventions: A life development model. In: Murphy, S.M.(Eds.) *Sport psychology interventions*. Human Kinetics: Champaign IL. pp. 19-38.
- 20) 海老原修 (1992) 役割の取得と喪失からみるスポーツにおける引退. *コーチングクリニック* 6(4): 6-11.
- 21) 遠藤辰雄編 (1981) *アイデンティティの心理学*. ナカニシヤ出版: 京都.
- 22) エリクソン: 小此木啓吾訳編 (1973) *自我同一性-アイデンティティとライフサイクル-*. 誠心書房: 東京. <Erickson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*. Psychological Issues, No.1. International Universities Press: New York.>
- 23) Gorbett, F. (1985) Psycho-social adjustment of athletes to retirement. In: Bunker, L.K., Rotella, J.A. & Rally, A.S. (Eds.) *Sport Psychology: Psychological considerations in maximizing sport performance*. McNaughton & Gunn: Ann Arbor, MI. pp.284-295.
- 24) Gordon, R.L. (1989) Athletic retirement as role loss: a construct validity study of self as process and role behavior. Unpublished doctoral dissertation, Ohio State University: Ohio.
- 25) Gordon, R.L. (1995) Career transition in competitive sport. In: Morris, T. & Summers, J. (Eds.) *Sport psychology: Theory, applications and issues*. Jacaranda Wiley: Brisbane. pp. 474-501.
- 26) Greendorfer, S. L. & Blinde, E.M. (1985) "Retirement" from intercollegiate sport: Theoretical and empirical considerations. *Sociology of Sport Journal* 2: 101-110.
- 27) Greendorfer, S. L. & Kleiver, D. A. (1982) Sport retirement as social death: The college athlete. Paper presented at the annual conference of the North American Society for the Sociology of Sport, Toronto.
- 28) Grove, J. R., Lavallee, D., & Gordon, S. (1997) Coping with retirement from sport: the influence of athletic identity. *Journal of Applied Sport Psychology* 9: 191-203.
- 29) Haerle, R. (1975) Career patterns and career contingencies of professional baseball players: An occupational analysis. In: Ball, D.W. & Loy, J.W. (Eds.) *Sport and social order*. Addison-Wesley: MA. pp.461-519.
- 30) Hill, P. & Lowe, B. (1974) The inevitable metathesis of the retiring athlete. *International Review of Sport Sociology* 9: 5-32.
- 31) Kaustenberg, R. (1981) *Death, society, and human experience*. Second edition. St. Louis: Mosby.
- 32) Kubler-Ross, E. (1969) *On death and dying*. New York: Macmillan.
- 33) Lavallee, D., Gordon, S., & Grove, J.R. (1997)

- Retirement from sport and the loss of athletic identity. *Journal of Personal and Interpersonal Loss* 2: 129-147.
- 34) Lavallee, D., Grove, J. R., & Gordon, S. (1997) The causes of career termination from sport and their relationship to post-retirement adjustment among elite-amateur athletes in Australia. *Australian Psychologist* 32(2): 131-135.
- 35) Lerch, S. (1981) The adjustment to retirement of professional baseball players. In: Greendorfer, S. L. & Yiannakis, A. (Eds.) *Sociology of sport: Diverse perspective*. Leisure Press: West Point, NY. pp. 138-148.
- 36) Lerch, S. (1982) Athlete retirement as social death. In: Theberge, N. & Donnelly, P. (Eds.), *Sport and the sociological imagination*: 259-272. Fort Worth, TX: Texas Christian University Press.
- 37) Lerch, S. (1984) The adjustment of athletes to career ending injuries. *Arena Review* 8, 54-65.
- 38) レヴィンソン：南博訳（1992）ライフサイクルの心理学（上・下）。講談社学術文庫：東京。<Levinson, D. J. (1978) *The seasons of a man's life*. The Starling Lord Agency: New York.>
- 39) McLaughlin, P. (1981) Retirement: athletes transition. *Champion* 5 (2), 15-16.
- 40) McPherson, B. D. (1978) Former professional athletes' adjustment to retirement. *The Physician and Sports Medicine* 6 (8): 52-59.
- 41) McPherson, B. D. (1980) Retirement from professional sport: The process and problems of occupational and psychological adjustment. *Sociological Symposium* 30: 126-143.
- 42) McPherson, B. D. (1984) Sport participation across the life cycle: A review of the literature and suggestions for future research. *Sociology of Sport Journal* 1: 213-230.
- 43) Mihovilovic, M. (1968) The status of former sportsmen. *International Review of Sport Sociology* 3: 73-96.
- 44) Murphy, S.M. (1995) Transition in competitive sport: Maximizing individual potential. In: Murphy, S.M. (Eds.) *Sport psychology interventions*. Human Kinetics: Champaign IL. pp. 331-346.
- 45) Murphy, G. M., Petitpas, A.J. & Brewer, B.W. (1996) Identity foreclosure, athletic identity, and career maturity in intercollegiate athletes. *The Sport Psychologist* 10: 239-246.
- 46) 中込四郎（1993）*危機と人格形成*。道和書院：東京。
- 47) 中込四郎（1996）*競技引退後の同一性再確立の過程*。文部省科学研究費一般研究(C)平成6・7年度研究報告書（課題番号：06680085）：1-78。
- 48) 中込四郎（1998）*プロサッカー選手のキャリア移行に関する研究*。平成8年度プロフェッショナルスポーツ助成研究報告書（筑波大学体育研究科）：46-54。
- 49) Ogilvie, B. C. & Howe, A.M. (1982) Career crisis in sport. In: Orlick, T., Partington, J., & Salmela, J. (Eds.) *Mental training for coaches and athletes*. Fitness and Amateur Sport: Ottawa. pp. 176-183.
- 50) Ogilvie, B. C. & Howe, A.M. (1986) The trauma of termination from athletics. In: Williams, J.M. (Ed.) *Applied sport psychology*. Mayfield: CA. pp. 365-382.
- 51) Ogilvie, B. C. & Taylor, J. (1993a) Career termination in sports: When the dream dies. In: Williams, J. M. (Ed.) *Applied sport psychology: Personal growth to peak performance* (). Mayfield: CA. pp. 356-365.
- 52) Ogilvie, B. C. & Taylor, J. (1993b) Career termination issues among elite athletes. In:

- Singer, R. N., Murphy, M., & Tennant, L. K. (Eds.) Handbook of research on sport psychology. Macmillan: NY. pp. 761-775.
- 53) 岡本祐子 (1990) 自己実現をめぐる。小川捷之ほか編 臨床心理学大系 3 ライフサイクル。金子書房: 東京, pp. 193-214.
- 54) 岡本祐子 (1994) 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究。風間書房: 東京。
- 55) 岡本祐子 (1995) 中年期の職場不適応事例にみられたアイデンティティ危機とその再体制化。心理臨床学研究 13(3): 321-332.
- 56) 岡本祐子 (1997) アイデンティティ発達の心理学 成人期・老年期の心の発達と生きることの意味。ナカニシヤ出版: 京都。
- 57) Orlick, T. (1980) From hero to zero. In Orlick, T. (Ed.) In pursuit of excellence. Leisure Press: Illinois. pp.167-175.
- 58) Orlick, T. (1986) Life after sport. In Orlick, T. (Ed.) Psyching for sport: Mental training for athletes. Leisure Press: Illinois. pp. 169-176.
- 59) Parker, K.B. (1994) "Has-beens" and "wanna-be": Transition experiences of former major college football players. The Sport Psychologist 8: 287-304.
- 60) Pearson, R. E. & Petitpas, A.J. (1990) Transitions of athletes: Developmental and preventive perspectives. Journal of Counseling & Development 69: 7-10.
- 61) Petitpas, A., Champagne, D., Chartrand, J., Danish, S., & Mupphy, S. (1997) Athlete's guide to career planning. Human Kinetics: Ottawa. pp. 1-227.
- 62) Petitpas, A., Danish, S., McKelvain, R., & Murphy, S. (1992) A career assistance program for elite athletes. Journal of Counseling & Development 70: 383-386.
- 63) Rosenberg, E. (1981a) Gerontological theory and athletic retirement. In Greendorfer, S. L. & Yiannakis, A. (Eds.), Sociology of sport: Divers perspectives. Leisure Press: NY. pp. 118-126.
- 64) Rosenberg, E. (1981b) Professional athletic retirement. Arena Review 5(2): 1-11.
- 65) Rosenberg, E. (1982) Athletic retirement as social death: Concepts and Perspectives. In Theberge, N. & Donnelly, P. (Eds.) Sport and the sociological imagination. Texas Christian University Press: Texas. pp. 245-258.
- 66) Schlossberg, N.K. (1981) A model for analysing human adaptation to transition. The Counselling Psychology 9(2): 2-18.
- 67) Schlossberg, N.K. (1984) Counselling adults in transition. NY: Springer.
- 68) Shaffer, K.A. (1990) Identity, self-esteem and self-concept upon retirement from elite level sport. Unpublished master dis-ertation, The University of Alberta: Edmonton.
- 69) Sinclair, D. A. (1990) The dynamics of transition from high performance sport. Unpublished doctoral dissertation, University of Ottawa: Ottawa.
- 70) Sinclair, D. A. & Orlick, T. (1993) Positive transitions from high-performance sport. The Sport Psychologist 7: 138-150.
- 71) Sinclair, D. A. & Orlick, T. (1994) The effects of transition on high performance sport. In Hackfort, D. (Ed.) Psycho-social issues and interventions in elite sports. Lang: Frankfurt, Germany. pp. 29-55.
- 72) Svoboda, B. & Vanek, M. (1982) Retirement from high level competition. In Orlick, T., Partington, J., & Salmela, J. (Eds.) Mental training for coaches and athletes. Fitness and Amateur Sport: Ottawa. pp. 166-175.

- 73) Swain, A. D. (1991) Withdrawal from sport and Shlossberg's model of transitions. *Sociology of Sport Journal* 8: 152-160.
- 74) 鎌幹八郎ほか編 (1998) アイデンティティ研究の展望 -1. ナカニシヤ出版: 京都.
- 75) Taylor, J. & Ogilvie, B. C. (1993) A conceptual model of adaptation to retirement among athletes. *Journal of Applied Sport Psychology* 6: 1-20.
- 76) 豊田則成・中込四郎 (1996) 運動選手の競技引退に関する研究: 自我同一性の再体制化をめぐって. *体育学研究* 41(3): 192-206.
- 77) 豊田則成 (1997) スポーツ競技者の競技引退に関する研究-プロ競技者とアマチュア競技者との比較から-. 平成9年度笹川科学研究助成最終成果報告(課題番号: 9-022): 1-13.
- 78) 豊田則成 (1999) アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究 -中期危機を体験した元オリンピック代表選手-. *スポーツ教育学研究* 19(2): 117-129.
- 79) Ungerleider, S. (1997) Olympic athletes' transition from sport to workplace. *Perceptual and Motor Skills* 84: 1287-1295.
- 80) Weinberg, K. & Arond, H. (1952) The occupational culture of the boxer, *American Journal of Sociology* 57: 460-469.
- 81) Werthner, P. & Orlick, T. (1982) Transition from sport: Coping with the end. In T. Orlick, J. Partington, & J. Salmela (Eds.), *Mental training for coaches and athletes*. *Fitness & Amateur Sport: Ottawa*. pp. 188-192.
- 82) Werthner, P. & Orlick, T. (1986) Retirement experience of successful Olympic athletes. *International Journal of Sport Psychology* 17: 337-363.
- 83) Wolfe, R. & Lester, D. (1989) A theoretical basis for counseling the retired professional athlete. *Psychological Reports* 64: 1043-1046.
- 84) Wylleman, P., De Knop, P., Menkehorst, H., Theeboom, M., & Annerel, J. (1993) Career termination and social integration among elite athletes. In S. Serpa, J. Alves, V. Ferreira, & A. Paula-Brito (Eds.), *Proceeding of the 8th World Congress of Sport Psychology*. *International Society of Sport Psychology: Lisbon*. pp. 902-906.
- 85) 山本多喜司・ワップナー (1991) 人生移行の発達心理学. 北大路書房: 京都.

本研究の一部は、「競技引退によって体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討」と題して、*体育学研究*に掲載予定である。

競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討

要 約

本研究で、アスリートの競技引退を課題とした先行研究を概観したところ、今後の研究展望としていくつかの示唆が得られた。まず最初に、我々は理論研究と実証研究に大別して概観した。理論研究からは以下の事柄が明らかとなった。

1. 社会老年学や死亡学からの理論的枠組みが有益であるとされたが、競技引退を厳密に理解するには疑問が残った。
2. 成人移行論のモデルはアスリートの引退への対応に影響する多くの要因を説明するのに適している。
3. 生涯発達論は、引退を通じてのアスリートの体験を理解し説明するのに適している。

その一方で、実証研究からは以下の事柄が明らかとなった。

1. 研究対象がプロからアマチュアへと拡大されいった。
2. 研究課題が競技引退に関連する問題の把握から、引退後の適応問題を規定する要因の同定、そして、具体的な介入方略の探求へと移り変わっていた。
3. 個々のアスリートが引退を通じて何をどのように獲得していったのか、そして、それをその後の人生にどのように役立てていったのかを明らかにすることが重要な課題であるとされた。

次に、諸外国において既に実施されている専門的介入プログラムの多くが生涯発達を理論的枠組みとしていたことを確認した。

これらの概観によると、長期的な展望に立って引退するアスリートの体験を把握し、引退後の適応に影響するいくつかの要因を明らかにすることが必要となる。最後に、アイデンティティ再体制化が有益な枠組みであることを提案したい。この観点から、著者らは、アスリートは競技に対して主体的な関わりを持つべきであり、特に移行期には、具体的な見通しの中で社会化に気づくことが求められることを指摘している。

Discussion of identity reconfirmation with retiring athletes

abstract

The present study was a review of the literature on adjustment after athletic retirement, and presented several beneficial suggestions for future research. First of all, the literature was divided into two categories; theoretical study and empirical research. The theoretical studies suggested the followings;

1. Logical application from social gerontology and thanatology has been suggested to be useful to understand the athletic retirement, however, it left some questions on its full explanation for an athlete's leaving the sport.
2. Models of adult transition could account for the various factors influencing athletes' responses to retirement.
3. Life span development theory was suitable for understanding and explaining the athletes' experiences through athletic retirement.

On the other hand, the empirical researches suggested the followings;

1. The range of subject of investigation was extended from professional athletes to amateurs.
2. Themes of researches were transferred; from finding the problems with athletic retirement, identifying factors affected adaptation after retirement, and to searching for concrete strategies of intervention.
3. It was a matter of importance for the future research on athletic retirement to explain what and how elite athletes obtained through the athletic retirement, and how they put it useful into their later life.

Secondly, major career assistance programs in some foreign countries were reviewed. Most of these programs were found to be operated based on the life span development theory to help athletes with transition.

These reviews made it clear that it is necessary to grasp the experiences of retiring athlete and to identify several factors that contribute to adjustment for post-athlete from longitudinal perspective. In conclusion, we suggest most useful framework to understand and explain the athletic retirement be the reconfirmation of ego identity. From this point of view, athletes should involve in his/her athletic activities autonomously, and especially, in a period of transition, retiring athletes should anticipate their socialization, and should have some concrete perspectives about post-athlete before confronting with retirement crisis.